協会ニュース 2014

岩手大会特別号（特別分科会編）

本号の記事

１．被災職員の体験談

２．特別分科会に参加して

平成 26 年 9 月 10 日発行

全国公立高等学校事務職員協会

事務局：東京都立小山台高等学校

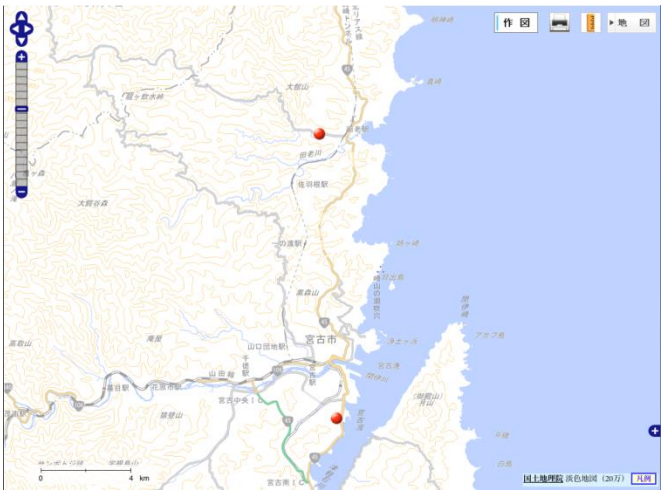
電話　：03-3714-8155

住所　：東京都品川区小山 3-3-32

被災職員の体験談（宮古北高校・宮古商業高校）

岩手県立一関工業高等学校　事務長　小野寺千昭
岩手県立住田高等学校　　事務長　村上　富勝

１　学校紹介



一関工業高校の小野寺千昭といいます。３月 31 日に人事異動により転勤しましたので、その間のお話をします。よろしくお願いします。

平成 23 年３月 11 日、私は 10m の堤防で有名だった宮古市田老にある宮古北高校（上の●）に勤務していました。１学年２学級の普通科の小規模校で、海岸から内陸部へ３km程の所に建っていました。私は出身が内陸部で津波の経験はありません、岩手は御存知のように広い県で、内陸部、沿岸部では災害の種類に違いがあります。

この時期は卒後式、入試も終わり入試処理のため学校は休みでした。発災時にはクラブ活動に来ていた生徒が十数名学校にいました。村上さん宮古商業（下の●）の紹介をお願いします。

（宮商）

宮古市の中心部から海岸に数キロ離れた磯鶏地区にあり、国号 45 号線沿に位置し、近くには宮古水産高校、宮古警察署があります。４科 12 クラスの規模の商業高校です。近くの宮古水産高校には津波が校庭まで押し寄せたようでしたが、本校はやや高台に位置していたため直接の津波による被害はありませんでした。

２　発災時の対応

大きな揺れが学校を襲った時、事務室は通常勤務をしていました。揺れが激しかったため全員外へ避難しました。

教員、生徒も玄関付近に集合し揺れが収まるのを待ちました。とにかく寒い日でしたので対流型ストーブを用意して暖を取らせました。津波警報が防災無線から聞こえたため万一を考え、生徒を高台へ避難するよう指示を出しました。これは津波を想定して防災訓練をしていた事が役に立ったと思っています。

学校の側を神田川が流れています。その流れを遡るように民家が学校の方に流れてきて、途中で粉塵と大きな音をたて粉々に砕け散るのを見ました。津波の恐ろしさ目の当たりにした瞬間でした。

宮商はいかがだったでしょうか。

（宮商）

３年生は３月１日に卒業式を終えており、１・２年生は年度末を迎え午前中は課外、午後は部活動をしていました。14 時 46 分、今迄に経験したことのないような大きな縦揺れに襲われました。地鳴りと共に校舎が軋み崩れてしまうのではないかと思われるれるほどで、机にしがみついてるしかない

状況でした。
　副校長が２階から走ってきて、校長から海上で練習しているヨット部生徒の避難をさせるよう指示があり職員をハーバーへ向かわせ、校舎にいた生徒や部活動中の生徒を顧問の指示によりグランドへの避難を開始していました。
　揺れが収まったのと同時に校庭に避難しました。グランドには複数の亀裂が走り液状化によると思われる泥水が数ケ所で噴出していました。
　校舎内にまだ残っている生徒が居るか、全ての棟の確認を行いました。この時には大きな津波が来るなどとは予想もしてなかったので、保護者が迎えに来た際は生徒を引き渡し帰宅させました。
　その後保護者と帰宅した生徒が津波に巻き込まれ、生徒は九死に一生を得ましたが保護者は命を失ったことが分りました。
　この２日前の３月９日は岩手県の高校入試で試験が開始されて間もなく大きな地震があり、一時、試験が中断しました。今にして思えばこの地震が前兆だったのだなと思いました。
　村上さんは現在の勤務校の前は支援学校にもいましたので、支援学校はどのような対応したか聞いていますか。
（釜石祥雲支援）
　平成 23 年の４月１日に釜石祥雲支援学校に異動しました。釜石市の中心部より西に位置し海岸線より数キロ離れた山沿いにある支援学校です。震災当時は、小学部は午前授業で帰宅したが中学部は教室等で揺れが収まるまで待機していたそうです。高等部の生徒は病院校舎に居たので揺れが収まるのと同時に、病院棟の駐車場に避難したようでした。事務長は安全確保のため被害状況の確認、ラジオ、防災無線で情報収集に努めたとのことでした。
　余震が続いていたので校舎２階は危険であることから１階の教室等に集め、高等部は寒かったのでスクールバスを病院駐車場に移動、バスに収容し寒さを凌いだそうです。
（宮古恵風支援）
　宮古恵風は、海岸近くであるものの高台で国道のトンネルの山の上に立っている学校なので、直接津波が心配される場所ではないが、北に田老地区、南は宮古市役所に向う道しか無くどちらに向うにも、海岸近くの低い場所を通らなければなら場所にあるため、津波で道路が封鎖状態になると陸の孤島となる場所にある学校です。
　小学部から高等部までの学校で、半数位は隣に併設されている宮古市立の『はまゆり学園』の子で、残りは宮古市内等からの通学生ということです。
　震災の時は、通学生用のスクールバスが児童・生徒を送るための準備を始める時間帯の地震であったので、あと少し（30～40 分）遅い時間であれば、スクールバスが児童生徒を乗せたまま市役所近くで津波をかぶっていたかも知れない状況だったそうです。（恵風的には時間帯は不幸中の幸いだった）
　緊急エリアメールが鳴ったため、事務職員が生徒昇降口と職員玄関のドアを開放したそうです。
　その直後、地震のゆれが大きく長かったため、校長と事務長がその昇降口等を確認しながら、子供たちを避難させようと決め、その場に来た生徒指導部長が非常放送で職員と子供たち全員を確認できる場所に避難させたとのことでした。
　また、津波の情報が入ったので、学校に通学生の子供たちを保護者が迎えに来られるまで預かる方針を決め、一晩を過ごす準備を行ったとのことでした。（その時はまだ、あんな規模になるとは思わずとりあえず一晩と思って準備を始めたようです）

３　発災後すぐに停電したその時の対応

停電により通信が遮断しましたので、情報の収集が出来ず、県内の津波被害状況、地震被害状況が全く知ることが出来ませんでした。車のワンセグも当時、田老では見ることが出来ませんでした。ラジオも手元になく、自家用車のラジオを聴くという事も思いつきませんでした。

停電するとポンプが稼働せず受水槽の水も使えなくなります。飲み水確保のためグランドにあった直圧式水道なら出るのではないかと思い、生徒に手伝わせありたっけのバケツ・やかん・鍋に水を汲み確保しました。後々これが非常に役に立ちました。高架水槽の水はトイレ用水に利用できると思い飲み水には使用しませんでした。

携帯電話も初めは使えましたがその後は基地局が津波被害にあったのか通じなくなり、生徒の家庭との連絡が取れず生徒はとりあえず学校に置くことにしました。

宮商さんではどのような対応だったでしょうか。

（宮商）

停電したことにより外部との連絡、情報収集は全くできず、当然携帯電話も利用できなくなるなどパニック状態でした。まずラジオを準備し情報収集することになりましたが、間もなく大津波情報を聞くことになりました。用務員さんと受水槽を確認しようということで見たところ、茶褐色に変色してて飲料水どころか利用できないことがわかり諦めました。使用できる水は高架水槽にある分だけという状況で節水の張り紙をし、極力無駄な水の使用を制限することにしました。今後の対応について話し合ってたころ近隣住民が続々学校に集まってきました。

支援学校では入試が別の日程なので、生徒がたくさん残っていたのではないでしょうか。

（釜石祥雲支援）

普通授業で小学部は午前授業で帰宅し、残っていたのは中学部と高等部の生徒だったようです。

（宮古恵風支援）

普通授業日だったので、ほとんどの児童・生徒が出席していたとのことで、学部によっては保護者面談の日だった為、学校に泊まった保護者も２組いたとのことでした。ちなみに、学園の子供はすべて学園に返したうえで、学校に泊まったのは児童生徒 34 名、職員 43 名、保護者２名、その他１名だったそうです。

停電により、すべてのライフラインが止まった中で、学校で夜を過ごす準備をしたとのことで、配管に溜まっている水をバケツに汲み置き飲料水とトイレ排水の一部にしたようですし、電気不要の石油ストーブは２台しかなかったため、サーモンホールと呼ぶ集会室に子供たち全員と、暗幕を含めた暖をとれそうなものすべてを集めたようです。（運動マット、バスタオル、コート、ジャージ等々）ただ、子供たちと同じ場所で対策を話したりは出来ないため、対策本部は校長室のままとして、たまたま校長が住宅から自宅に持って帰るため車に積んであった小さな反射式ストーブ１台で過ごしていたようです。（仮眠も椅子に座ったままで２日間すごしたとか）

また、大津波警報が出て道路封鎖が見込まれたので、状況確認のため、職員を２人１組として３組を偵察に出し情報収集したとのこと。（３組としたのは、携帯電話もすでにつながらなくなっていたので、少し間隔を開けていくことにより車が渋滞で動けなくなったときに歩いて後ろの車に連絡することにより、学校にいち早く連絡できることを狙ったのだが、歩いて後ろの車に連絡をする職員が居なかったのであまり効果は無かったようだ）⇒戻ってきた職員からは、国道が渋滞により動ない旨報告を受けたとのことでした。

通信機能については、宮北同様電波の入りが悪く、校舎内ではラジオのＦＭしか入らなかったとのこと。（地震直後は携帯の気象情報等が使えたが、津波が来てからはＦＭのラジオだよりであった）職員駐車場でカーナビテレビが少しは映ったが、情報を得るたびに状況が悪くなる一方であったため、ガソリンやバッテリー保護の観点から使用は控えたようです。

４　避難所開設について

当時、県立高校のほとんどが避難所指定にはなっていませんでした。

宮北では宮古市から避難所の開設要求がありました。避難所指定になっていた小中学校が、より海辺にあったため校庭まで津波が押し寄せ、通路の確保が出来ず避難所にはできなかったためです。

避難所を学校のどこにするか、一番に耐震性を、次に暖房効果を、そして多くの人を収容できること、トイレがあること考え併せ、比較的天井が低く建築年度が新しい第２体育館に決定しました。

この判断は事務室が行いました。

幸いセミナーハウスに100組以上の寝具を常備していましたので、職員、生徒で第２体育館に運び、避難住民に貸しました。入り口には手書きの避難者名簿を用意し記入させました。誰が命じた訳でもないのですが職員が自主的に色々な役目を引き受けてくれました。当然避難所運営マニュアルもありませんでした。

受入れが夕方でしたので照明を考えなければなりません。体育館の中は学校にあった全ての対流型ストーブ６台を置き、暖房兼照明兼湯沸しとして活用しました。

300 名近い避難住民が集まりました。うっかりした事に、第２体育館は窪地にあり、下水管へ汲み上げ式との考えが欠如しており、トイレが溢れたため使用禁止とし、校舎のトイレを使用することにしました。夜になっていましたので第２体育館から校舎への通路の照明、トイレの照明が必要となりました。懐中電灯もありましたが本数が少なく、また買置きの電池も多くはありませんでした。

書庫を探したところロウソクが偶然出てきました。廃棄しないで残っていたステンレス製の灰皿に割り箸・画鋲・ガムテープで簡易燭台を作り要所、要所に置き照明としました。トイレの水は大きなゴミ箱を空にして水を貯め、そばにバケツを置き使用後に流すことにしました。切羽詰って来ると色々な知恵がでてくるものだと思いました。

セミナーハウスのガスが使えましたので、大きな鍋で米を炊きました。時々来る大きな余震で、火を止めたりしながら何とか炊き上げ、おにぎりにし塩をまぶしラップにくるみ避難住民を優先して１人１個、職員は半分でしたが配布しました。この時驚いたのは誰一人列を乱す者がいなかったという事です。

野球部が使用していた発電機があることに気が付いた職員がいて、体育館の外に置きエンジンを掛けジエットヒーターによる暖房と投光機による照明、職員が宿舎から持ってきたテレビとアンテナにより震災後初めてテレビを見ることが出来ました。避難住民も津波が襲来する画面を食い入るように見ていました。避難住民の中に事務職員の幼子を抱えた家族もいました。何の手助けも出来なかった事が今でも悔やまれます。

その日は氷点下まで気温が下がり、布団を被ってもガタガタ震えて眠れませんでした。ましてや家を流され着の身着のまま非難してきた方々は心配でまんじりとしない一夜を過ごしたことと思います。

宮商はどんな感じだったでしょか。

（宮商）

この日は寒く雪もちらつき始め寒さが身に染みる状況でした。宮古商業も避難場所には指定されていませんでしたが、この状況から避難所として運営するよう校長から指示がありました。避難所として指定したのが、前年に耐震工事を終えたばかりの第１体育館とし近隣住民、生徒職員が避難することになりました。合宿所から布団や毛布、各部で持ってるシートなど。また、寒さを凌ぐため柔道畳・マットあらゆるものを体育館に搬入しました。

ケガ人が運ばれてくるといった情報もあり、保健室から担架、薬品など運び込んだり各職員が生徒を使い対応に当たりました。この時点で職員生徒百数十名、近隣住民合わせて四百数十名の数に上っていました。

生徒も職員の指示で近隣住民やケガ人の対応に奔走し津波にのまれて全身冷え切っているケガ人に毛布を提供、体を摩って温めてあげたりしました。献身的に対応している生徒を見て頭が下がると同時に右往左往している自分が情けなくなりました。

学校に放置してあった発電機が１台あり照明を確保できました。前日すべての灯油タンクに給油していたことが幸いし、当面の灯油の心配がないことが有難かったです。職員がケガ人を何度か宮古病院に搬送しました。情報もなく現状を外部に伝えることができない状況でした。校舎は耐震工事が行われておらず危険であることから体育館を本部とし、トイレを使用する場合のみ本校舎に入ることを認めました。

そんな状況下で、まず避難者の住所氏名の把握が大事だということから手分けして聞き取り作業に入りました。今でも印象に残っているのは、私が聞き取りしたある方からの答えでした。住所はと聞くと「ありません」との返事でした。戸惑いましたが、改めて聞き直すと住居が津波で流されたのでもう住所なんか無いんだと言うことだったようです。地域全部が流出したとのことでした。答えられた意味が分かり、私も言葉がありませんでした。次第に情報が入ってきて、市内の津波の状況や各地での甚大な被害状況を聞くにつけ、全く信じられない現状に恐ろしさを強く感じました。その晩から教職員のある意味での戦いが始まったのでした。夜中も度々の余震の中、一睡もできず体育館の天井を見ながら「この先一体どうなるのだろう」と先の見えない不安でいっぱいでした。

支援学校は配慮の必要な子供達も居たと思いますが、如何だったでしょうか。

（宮古恵風支援）

知的障がいと肢体不自由の学校なので、数人の子は不安がる子もいたようですが、最初の晩は職員全員もいたので、マンツーマン以上の対応ができ、大きな混乱はなかったようです。

食料も入手のすべが無いと思っていたので、職員が持っているお菓子や家庭科の材料を含めたすべてのものを一か所に集めて分配を考えたようですが、隣の学園（入所施設）からおにぎりとみそ汁は提供してもらうことができ、食べる物には困らなかったようです。

ただ、隣接の学園の他に、近くに成人用の知的障がい施設が有るのですが、停電で入所者が混乱をおこしても管理できなくなりそうなので、学校の体育館に避難させてほしいとのことで職員を併せ100 名程度の人たちが避難をしてきたようです。

100 人は一晩で余りの寒さに、翌日は自分たちの施設で乗り切ることに決めたようで、一晩限りの避難だったとのことでした。

５　生徒の安否確認について

震災後２日目当たりから生徒・職員の安否確認が始まりました。通信手段が途絶え、車での確認も国道 45 号線不通のため山側の迂回ルートを辿り燃料不足を心配しながらとなり困難を極めました。宮北は山田町や田野畑村等の遠隔地からの生徒もいましたので安否確認にはかなりの時間を要しました。

宮商さんは生徒の数も多いので大変だったのではないでしょうか。

（宮商）

卒業生の安否確認や進路先の状況の確認、在校生の確認など教員は市内全域の避難所、あるいは田老まで奔走しました。幸い卒業生は全員無事であったが、帰宅した生徒が１名亡くなったことが残念でなりませんでした。最終的に生徒の確認ができたのは３日目ぐらいではなかったかと思います。この頃には職員の家族にも亡くなられた方が居たとの情報も入り始めました。

支援学校の場合はどのようにして確認したのでしょうか。

（宮古恵風支援）

恵風の場合は、欠席していた生徒の安否確認もですが、主に保護者の安否確認と、児童生徒を無事保護者に返すための作業が続いたようです。

現業職員に地元の方で津波に遭わない山道を知っている人がいたので、その人の案内で翌日の土曜日早朝に学校に泊まった保護者の親子２組と、自宅が流された可能性のある職員、単身赴任等で自宅の状況を知りたい職員等を学校から離れることを認め返したとのことです。希望を確認したところ半数近くの職員は学校に残れるということだったので、学校の子供たちを守りながら保護者との連絡を取る対応はその人数で行うことができると判断したようです。残る職員から数人を選び、自宅に帰る職員らと同様に山道を抜けて宮古市内へ何とか入り状況を確認後戻るが、道路が瓦礫で埋め尽くされているため長期戦になることへの覚悟をきめたとのこと。ようやく 13 日に宮古市の災害対策本部から緊急車両指定書３部入手。15 日には県の災害対策本部から緊急車両ステッカーを入手。職員の車４台を緊急車として指定して捜索等にあたったとのこと。（４台の指定は、燃費のいい車２台、多くの人数が載れるワンボックスカー２台）

結局、子供たち全員を保護者に引き渡すことができたのは、４日後の 15 日の夕方だったようです。

６　その後の避難所運営について

停電のため機械警備が出来ず宿直の割振り・日直の割振り、更に各担当の割振りを行いました。

また、夕方には校長室にてミーティングを行い、その日の出来事、明日の予定の情報共有を図りました。

13 日日曜日の夕方に電気が復旧しました。比較的早めに復旧したのは、避難所を優先的に復旧作業したためと聞き、感謝の気持ちで一杯でした。ＦＦ暖房・ジエットヒーターが使用可能、電気炊飯器による炊飯も可能となり避難所運営もだいぶ楽になりましたが、石油が少なくなりました。より暖房効果のある、セミナーハウスと格技場に避難場所を移すことにしました。高齢者・子供に配慮しながら大移動が開始されました。パソコンも使用出来ましたので、避難者名簿をパソコンで作成し直し市町村へ情報提供することにしました。校長が「阪神淡路大震災時の講演等で公助が入るのは震災３日後だからそれまで職員が頑張らなければならない。」と言っていたとおり、地元の消防団が炊き出しのおにぎりを日曜日の午後に届けてくれました。

また、宮古市の担当者が常駐するようになり職員の負担は軽くなり、本来の職務を少しずつですが行うことが出来るようになりました。

宮商では食べ物はどうしたのでしょうか。

（宮商）

学校の近くのコンビニエンスストアの店主から食料や飲料水が残っており、無償で提供したいと申し出があり戴きました。しかし、全員には行き渡らず教職員は飲み物だけでありました。

釜石に出張で出かけた職員の安否が分からず心配したのですが夜半に戻り、各地での被害の甚大さを生で聞くこととなりました。職員は夜通し訪問者への対応、老人のトイレ等への世話、付添いやらと本当にフル回転で当たりました。殆どの職員は布団や毛布が行き渡らない状況で一夜を明かしました。翌日には周辺の住人の方から差し入れがあり、避難者全員で分け合って凌ぎました。教職員の食事は、冷えきって固くなりかけたおにぎり１個程度がその日の食事でありました。

建設会社に勤務する方が、自らも被災したにも拘わらず、会社から発電機・燃料・仮設トイレなどを提供してくれて、その日から体育館にはジェットヒーターを４台全て稼動でき暖を取ることができ、改めて人への思いやりを学ばせていただきました。この頃には避難所生活の運営に注文をつけたり、支援物資の不足に怒りを表す避難者も出てくる状況になってきました。

そこで、①避難者名簿の作成、②病人の確認、③各所の掃除や消毒、④人探しのための名簿掲示、⑤行政機関への報告、⑥灯油タンクの見回り、⑦支援物資の管理等全員で当たりました。

ガス漏れの危険があるということで、調理が一切できなかったことが大変でした。

支援学校には小中学生もいますが食事はどうしたのでしょうか。

（釜石祥雲支援）

調理室には、米とか食料がある程度あったようでその晩から煮炊きして食事が取れたようでした。その後も一時帰宅した職員が自宅より食料、日用品、毛布、燃料等持ち込み凌いだようでした。

（宮古恵風支援）

先ほど話したように、初日と２日目の昼まではなんとか学園で提供してもらったのですが、それも限界があるだろうと思っていたところ、土曜日の午後には市役所の職員が来校し、子供たちが泊まっている限りは避難所に準じた扱いを行う旨を依頼。翌 13 日には避難所扱いを決めた連絡があったとのことで、最低限の食料確保の見込みに安心したとのことでした。

それと、翌日の土曜日に自宅に返した職員たちが、おにぎりやカップラーメン等を大量にもってきたので当分はなんとか乗り切れるとも思っていたそうです。

ただ、電気の復旧は３月 22 日、電話は４月 18 日、インターネットは４月 20 日と１ヶ月以上かかっての復旧で大変だったようでした。

７　学校施設の提供

田老では津波による犠牲者が多く見つかり、遺体安置所が必要となりました。宮古市から遺体安置所に第１体育館を提供して欲しいとの申し入れがありました。生徒が震災後は使用する所です。色々と迷いました。現在の状況下では人道的立場が、優先すると考え受け入れることにしました。使用後の事を考え職員で体育館の床全面にブルーシートを敷きガムテープで止めました。たまたま行事で使用した大きなブルーシートがあったことが幸いしました。

その後山火事の発生により、旧役場内にあった臨時診療所に火の手が迫り保健室を臨時診療所に、

行方不明者相談窓口を相談室にと学校施設が色々な避難施設へと変わって行きました。利用者の利便を考え学校内は全て土足可としました。施設の受入判断は施設管理担当の事務長の判断となります。県教委に相談する術がない時は英断も必要だと思いました。責任は後で取れば良いとの考えでした。

宮商では教室等の開放はあったのでしょうか。

（宮商）

耐震性ということから、本校舎へのトイレ以外への立ち入りを一切禁止しました。日が経つにつれ職員は一生懸命世話やら対外的対応やらと忙しく動き回ってたのですが、避難者は全くお客様状態でしたので、自分たちができることは進んでみんなでやりましょうと声掛けし、みんなで協力し運営することにしました。それまでは職員も休むことができず 24 時間勤務状態でしたので、職員全員で協議し班に分け８時間勤務にしようということになりました。それ以外の時間は家に帰っても良いということで、私的時間にしたことで気持ちに余裕ができたと言うか、その後の避難所生活に当たることができたのだと思います。この間、他方面からの支援物資が届くようになりました。ある他県からの支援で、一昼夜かけ車を飛ばし飲料水やらりんごなど届けてくれた善意には本当に頭が下がる思いでした。

支援学校は関係施設がそばにありますが、避難所とかの要請はあったのでしょうか。

（釜石祥雲支援）

要請はなかったようですが、学校の近くに宮古市の『いこいの家』という施設があり帰宅できない支援学校の数家族がその後入居したようです。

また、新年度になり、車が被災し通学手段が絶たれた家族に対し通学支援ということで、釜石市内のタクシー会社２社と大槌町のタクシー会社１社と委託契約し、10 人程が利用することになり４年目を迎えております。就学奨励費より支出しております。

（宮古恵風支援）

先の話どおり、成人施設から初日の夜だけ体育館への受入要請があったようですが、後は避難してくる人も無いのに市から避難所扱いされたので、食料等の心配がないだけで避難所としての苦労はなかったようです。

８　自衛隊による支援活動

宮古市より自衛隊の支援物資の中継基地集積場に施設を貸して欲しいとの申し入れがありました。第２体育館を貸すことにしました。ここも土足可としました。

自衛隊のトラックが支援物資を満載に学校に乗りつけました。支援物資の中身はお菓子・カップヌードル、部隊等が使用する緊急用のパンでした。

17 日には簡易風呂が自衛隊により設置されました。避難住民は１週間振りで入浴し、少しは疲れが取れたのではないか思います。職員にも入浴許可が出て１週間分の汚れと疲れが取れて大変感謝していました。18 日には給水車が届きました。それまでは消防団がタンクを設置して湧き水を汲み毎日届けてくれました。

全国各地からペットボトルの水・食料品・毛布等が沢山届きました。それらは常駐している市役所職員により避難住民に配られました。

宮商さんでは自衛隊の支援はあったのでしょうか。

（宮商）
　特にありませんでした。10 日余りが過ぎ、近隣の磯鶏小学校さんと相談し、本来の避難所であり常駐している医師や手厚い支援を頂ける河南中学校へ移動して頂こうと市の方を含め協議することにし、３月 19 日の午前中をもって宮古商業高校の第１体育館を閉鎖することになりました。多くの避難者からは職員による献身的なお世話を頂いたことへの感謝の言葉を頂きました。
　支援学校はどうだったのでしょうか。
（宮古恵風支援）
　学校が建っている場所は高台なのですが、貯水池は更に高い場所にあるためポンプアップしないと水をためることができないのだそうです。ところが、停電が長く続きましたので貯水池も枯れてしまったそうで、水の補給は当分できないと思っていたところ、自衛隊の給水車から貯水池に給水してもらえたので助かったと言っていました。

９　公舎の被害

　職員住宅等の被害ですが、宮北では海寄りにあった職員住宅が津波被害に合い、入居していた５人が住むことが出来なくなりました。その中には事務職員と家族もおり避難所生活の後、学校の宿直室に寝泊りしました。家族は自宅へ避難させました。職員の中にも自宅が流された者もおり、学校に寝泊りした者もいました。
　家族と連絡が付かず、本人、家族とも心配が絶えない中の避難所暮らしをした職員も多くいました。中には家族が津波の犠牲になったことを後で知った職員もいました。非常勤事務職員は母と祖母が津波に流され行方不明でありながら献身的に避難所運営してくれました。
　これらの職員に何の配慮もしてやれなかったことが、非常時のため心に余裕が無かったとはいえ今でも悔やまれます。
　村上さんもアパートが流され大変苦労されたと聞きましたが、その時状況をお話いたければ思います。
（村上事務長）
　被害はありませんでしたが、本校舎裏にあった公舎７世帯分について、居住者が居ないということから震災のあった前月に取り壊したばかりで、公舎を利用できなかったことが残念でなりませんでした。
　私も当時は本校より南の大槌町のアパートに住み宮古まで通勤しておりました。まさか町が全滅するような事態になるとは思いもよらず、釜石市に出張して無事戻った職員から様子を聞いて愕然としました。住んでたアパートは役場や消防署のあった近くでしたが、職員から国道 45 号線より海側は津波で全て流失し壊滅的な被害であった旨聞かされたときには信じられなく愕然としました。車も車検でディーラーに出して３月 11 日の夕方には戻ることになってましたが、修理工場自体が被災し従業員の方も亡くなられたと聞きました。アパートも車も流失し、残ったっものと言えば、着用してた衣類だけでした。
　数日後に大槌町に向かいましたが、アパートも跡形もなく基礎部分しか残っておりませんでした。魚が散乱し町中魚の匂いで充満してました。私も３月末まで学校のセミナーハウスでの生活を余儀なくされました。

10　通信遮断

田老では通信遮断がかなり長く続きました。学校専用の衛星電話が１台校長室に設置されるまでは、宮古市まで車で出向き合同庁舎にある衛星電話を借用し県教委と連絡しなければなりませんでした。

当然、毎日連絡することは出来ません。18 日には避難住民のための無線公衆電話が教室に３台置かれました。無線公衆電話にファックスを繋ぐ事が出来ると知り、避難住民が使用し終わってから県教委宛の要求書をファックスで送りました。

宮古市内は通信の回復が早かったのでしょうか。

（村上事務長）

合同庁舎のあたりは復帰が早かったようです。磯鶏地区は３月末近くまで通電もなく衛星電話が数台配布されました。仕事に関しては、合同庁舎で端末を借りて作業を行なったといった状況でした。

11　トイレ用水確保

田老は市水道の貯水場電源が復旧せず、発電機を使用し数時間の給水が開始されました。それまでトイレ用水で苦労していた避難住民からは給水開始と同時に拍手が起きました。

水道復旧までは、防火水槽の水と、受水槽内に残っていた水を受水槽の排水管を切り大きなホースを繋ぎ、避難住民にも手伝っていただきバケツリレーでゴミ箱に入れトイレ用水としていましたので住民の気持ちが痛いほど解りました。

宮古市内の水道復旧はいつ頃でしたか。それまでトイレ用水はどのように確保したのでしょうか。

（宮商）

支援で頂いた飲料水を利用したりしましたが、３月末になり電気が復旧し利用できたと思います。

12　新年度に向けて

事務室では旧年度処理、新年度に向けての処理をする必要がありました。宮北では全ての処理を県のホストコンピュター内の共有フォルダーに入れていました。通信遮断によりアクセス出来ずに大変困りました。県教委担当者に連絡し共有フォルダーのコピーをお願いし、後日届いたＵＳＢにより事務処理が可能となりました。バックアップし保存していなかったのが失敗でした。現任校では数ヶ月１回バックアップをＵＳＢに取り込み、金庫の中に保存しています。

また、宮古市内にある宮古高校がいち早く回線復旧したので、そこに出向いて財務会計の処理や通知をメールで受信をするようにと連絡がありました。ガソリン不足、また２台しかない端末機を６校が遠慮しながら操作するということで、せめて通知だけでも郵送する配慮が県教委に必要だったと思います。

取引金融機関、漁協でしたが津波被害に合いながらも数日後には取引再開してくれました。新年度の私費会計を考え、今後の取引について協議しました。通信遮断の中、被災職員もいる中「学校さんは預金残高がある限り払い出しを行います」という返事を支店長さんからいただきました。我々も頑張らなければならないとの気持ちを新たにしました。

宮商では事務処理はできたのでしょうか。

（宮商）

４月１日から釜石市にある釜石祥雲支援学校に異動しましたが、前任者との引継ぎを４月１日に行いました。宮古商業は平成 23 年度が４月 27 日にスタートを切りました。津波で甚大な被害のあった

宮古工業高校の２年生の生徒が復旧する迄の間、空き教室を利用して授業を行なうことになりました。
　８月末まで一緒に生活し学習したようです。この頃には生徒も現実を受け止め徐々に元気を取り戻したようでした。事務処理に関して言えば、３月中は端末が稼動できず事務処理ができないため合同庁舎の端末を利用するしかありませんでした。従って県教委への報告ものとか全てに対応できなかったこともありとても辛い思いをしました。

13　最後に

　私は震災の教訓として、転勤先で職員・生徒の名簿、被災者名簿、病院等の関係機関の電話番号、避難所開設時に必要な物品の保存場所を一覧にして何時でも取りだせるよう事務室に常備することにしています。災害はいつ起きるかわかりません。備えあれば憂いなしです。
　学校は安全で安心できる場所でなければなりません。被災した学校、避難所となった学校も学校再開を念頭に、慣れない避難所運営を行いました。災害の種類、発災季節により色々な備えが必要と思われます。被災県の職員として経験談をお話しました。皆様の今後の参考となれば幸いです。
　最後に先の震災時に全国の皆様から沢山のご支援をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。ご覧のように復興、復旧は道半ばでございます。これからも色々な面でご支援をお願いすることもあるかと思いますのでよろしくお願いします。
　それでは、村上さんからもお願いします。
（村上事務長）
　防災意識を持つことの大切さを改めて思い知らされましたし、全国の皆様からたくさん温かなご支援を頂いたこと、避難生活の中で見て聞いた人の助け合いの心、温かさというものを強く感じました。
　本当にありがとうございました。今後ともとろしくお願いいたします。

被災職員の体験談（高田高校）

岩手県立花泉高等学校　事務長　鈴木　典子

東日本大震災発災時は、壊滅的な被害を受けた校舎で仕事をしていました。

震災を体験した者は、震災を語り継ぐことも使命の一つと考えていたので、このような機会を作っていただきありがとうございます。また、震災以来全国多方面から物心両面に渡り多大なご支援をいただいたことに、心より感謝と御礼を申し上げます。

震災当時について DVD を使いながら話します。

先ほどの陸前高田市です。（画面の説明）陸前高田市唯一の高校が、高田高校です。所在地は陸前高田市高田町字長砂です。海岸の高田松原から１km のところに校舎が建っていました。

高田高校のプロフィールを紹介します。

昭和５年に創立。昭和 46 年、女子バレーボール部全国高校選抜大会で優勝。昭和 63 年には、野球部が甲子園夏の大会岩手県代表として出場。文武両道をモットーとしています。

平成 20 年に県立広田水産高校と統合しました。広田水産高校は家政科と海洋システム科があり、家政科は大船渡東高校に移り、高田高校には海洋システム科が設置されました。

平成 22 年 10 月、震災の半年前には創立８０周年記念式典が行われました。

発災時、１学年普通科４クラス、海洋システム科１クラス、全学年 15 クラス、全校生徒 537 名。市の中心部に位置しており、近くには陸前高田市役所・市民会館・体育館等の施設もあり、部活動等で利用していました。

さて、発災時です。（画面の説明）

３月１日に卒業式を終え、３月９日入学者選抜学力検査が行われました。小会議室では、教務課が入学者選抜資料作成をしています。３月 11 日は、課外授業の初日、１・２年出校日で午前授業でした。多くの生徒が部活動をしていました。校外で部活動をしていた生徒もいました。サッカー部は松原サッカー場、ソフトテニス部は市民体育館、水泳部は B&G 海洋センターにいました。卒業した３年生は４月からの進路に向けて自宅などで準備をしていたと思います。

14 時 46 分、体験したことのない大きな地震、同時に停電。ほとんどの職員が、一旦、机の下に身体を入れ、揺れが少しおさまったときにグラウンドに避難しました。職員室が１階でグラウンドに近かったこともあり、当初は職員のみが避難していました。校舎前第１グラウンドへの避難を放送しました。大きな揺れに驚いて、廊下で身動きがとれずにいた生徒もいます。校舎前第１グラウンドでは部活動ごとの点呼と確認をしています。

その後、職員が車のラジオから「釜石市で十数メートルの津波」との情報から、校舎裏第２グラウ

ンドへの避難をまた放送で呼びかけました。いま思い起こせば、地震で揺れている中で非常放送が冷静にできたこと、また、非常放送は蓄電池式で停電時でも使用できると判断できたことは、訓練で事務室が何度も放送担当をしていたからだと考えます。

それから教員は手分けして、校舎内に残っている生徒がいないか確認しました。校舎内を確認したことで、後に行方不明生徒が多数いる状況の中で、少なくとも校舎内に取り残された生徒がいないとの確信をもつことにつながりました。

私と事務長は耐火金庫を施錠し、事務室・職員室・入学者選抜資料作成をしていた小会議室を施錠しました。数日後、津波でなぎ倒された金庫を瓦礫の中からみつけ、ガスバーナーで開けると、卒業生台帳・学校沿革史・校印・出納員の印・会計システム操作カード等が保存されていました。

用務員は大型バス・スクーター・乗用草刈り機・非常用ラジオ付き電灯などを移動させました。校内で部活動をしていた生徒も、グラウンドへ避難して来ました。

避難者は、生徒 260 名弱、職員 45 名、地域住民 100 名、総勢 400 名強となりました。

このあと、津波の様子をご覧ください。(DVD 映像)

これは、岩手県立高田病院の屋上から病院の職員が撮影したものです。建物は４階建てです。地震発生から 40 分ほどで市街地、そして校舎が水没しました。高田高校周辺の水没した様子です。B&G 海洋センターです。津波のあと、水が引いたときの様子です。校舎は３階まで津波に襲われ全壊です。

私たちは、野球用雨天練習場・屋外・バスで寒い夜を明かすこととなりました。道路が寸断し孤立状態です。唯一残った建物である研修会館から、水・寝具・食器を運びました。雑木林から薪を拾い集め、キャンプファイヤーのように燃やし暖をとりました。バスは、老人・体調不良者・津波をかぶり全身濡れてしまい低体温になった避難者の救護に役立ちました。また、職員のミーティングにも役立ちました。

生徒は率先して避難者の誘導、避難所の設営をしてくれました。

数日後、校舎を見に行くと本当に悲惨な状況でした。

高田高校の当時の校長は、支援していただいた方々へのお礼を HP に掲載しました。その一部を紹介します。

> 震災から１ヶ月以上が経ちましたが、あの時の津波の恐ろしさは今でも脳裏に焼き付いています。今回の震災で我々は地震直後第２グラウンドに避難し、津波が高田の街を覆い尽くし家が流されるのを目撃しましたが、とても現実のものとは思えませんでした。その後第２グラウンドの野球用雨天練習場で１週間避難生活を送りました。ここでの生徒の行動・態度には驚かされました。地震の直後、第２グラウンドに避難指示を出しました。生徒たちは、本校体育館に避難して来た住民の方々の両脇を抱えて第２グラウンドまで誘導したり、雨天練習場に布団を運ぶなど、避難して来た人たちのために行動してくれました。本来であれば、家族の安否や家が流されていないかと泣き叫びたいほど不安があるはずなのに、どの生徒も慌てず冷静な行動をとってくれました。我々はこんな高田高校生を誇りに思います。

と、生徒のことをとりあげています。

また、夜中に体調が急激に変化した避難者をリヤカーに乗せ、畳のある避難所「高田齋苑火葬場」に移送してくれた生徒もいます。更には、衣服がずぶ濡れになった老人に、自分が着ていた運動着やウィンドブレイカーを脱いで貸していた生徒もいました。

３月 12 日、発災の翌日朝、初めて救援物資が届きました。乾パンでした。１㎝角のものを１人１個、私に届いたのは小指の爪ほどの氷砂糖１個です。２日目から野外炊飯の様に、雑木林の枯れ木を燃料に炊事しました。水も充分でなく、カレーライスを食べた後の食器を、電話帳をちぎって拭いたこともあります。ここでの避難生活が１週間続きます。地域住民も混在している中、もちろん電気・水道・ガス・灯油もないところです。

職員の役割分担をし、避難所組織をつくりました。

・食事・賄いの係（私がリーダーを務めました）
・生徒安否確認係
・宿泊係
・救護係
・ゴミ処理係
・市対策本部に衛星電話があったので、そことの連絡調整係

３月 13 日、職員も一時帰宅して自宅、家族の様子を確認することとしました。内陸に自宅がある職員は、食料・衛生用品・歯ブラシ・タオル・下着などを購入して避難所に戻りました。ポリタンクいっぱいに水を持って来た職員もいました。隣の一関市に自宅のある事務長は、大東高校から事務用品を譲り受けて持って来ました。毛布や、ボールペン・マジック・模造紙等です。

３月 18 日、陸前高田市スポーツドームに避難所を変更し移動しました。生徒の安否確認を強化することになりました。この時点で安否不明生徒は 74 名いました。停電、電話線の崩壊で通常の電話はもちろん、携帯電話も中継基地局の機能が失われているため、通話もメールも使えない。ガソリン事情も悪いところでした。

生徒課が中心となり、市内に百数十箇所ある避難所、そして遺体安置所にでかけました。地理に詳しい職員は、教員でも事務職員でも手分けして、手書きの不明者名簿を持ってでかけました。震災直後は、小さな部落会館・民家も避難所となっていました。地域のコミュニティがしっかりしている地区は確認がスムーズにできました。地区民とともに避難所生活をするにあたって、常日頃から各居住地区のコミュニティに参加させておくことの必要性を訴えている職員もいます。生徒、教職員の願いや祈りは届かず、生徒 24 名・教員１名が帰らぬ人となりました。帰らぬ生徒のなかには私の姪もいます。

３月 22 日、高田高校から約 20㎞の大船渡市内に避難所を移すことになりました。３度目の避難所は大船渡東高校研修会館です。普段は、部活動の合宿などで利用するセミナーハウスです。住宅が流出した 37 名の教職員が寝泊まりし、研修室が臨時職員室・事務室兼校長室です。

いよいよ学校再開に向けて準備が始まりました。会議用テーブルを二つ合わせて分掌ごとの席をつくりました。大船渡東高校からコピー機・印刷機・パソコンなども借りました。数日後からは、本校舎の進路指導室を事務処理専用室として借りました。時間を見つけては被災校舎に書類等も探しに行きましたが、使用できるような書類はほとんど有りませんでした。

３月 18 日、卒業した３年生の集会を陸前高田市スポーツドームで行いました。不明生徒の安否情

報提供の呼びかけ、進路状況の確認が主でした。

３月 25 日、１・２年生の集会を同じくスポーツドームで行いました。始業式の日程は未定、４月下旬までは休校となる可能性が高いこと、４月中旬までには何らかの情報を発信する予定と連絡しました。そして、生徒の動向確認です。家族の状況・自宅の状況・現在の居所、避難所なのかどこかに間借りしているのか。現在困っていることは何か、一人一人聴き取り、生徒個票に書き込んでいます。

３月 29 日、私たち事務職員を含め教職員は仮校舎で学校を再開するため、施設改修要望を取りまとめました。普通教室は９クラス分しかなかったので、15 クラス対応にしなければなりません。閉校になっていた校舎で、電気水道のライフライン、机椅子等も有りませんでした。校舎に入っているのは、使用できない不要物品でした。

校長・副校長・各課主任と一緒に廃校になっていた校舎を見学し、特別教室を間仕切りし普通教室にする。職員室を拡張して全職員が入れるような職員室にする等の改修要望、生徒用の机椅子、教師用机椅子等の最低限必要な設備品をまとめ、教育委員会事務局に送付しています。

校舎施設改修要望、設備品要望においても常にスピードを求められました。メールも使用できない状態で、近くの公所に行ってデータを確認するという状況でした。

４月６日、仮校舎設備の納入計画、清掃用具・保健室薬品・事務用品の発注事務を始めました。各分掌に納入希望調査、消耗品等の調整をしました。住宅が被災した職員の住宅確保、共済組合等の見舞金の説明もしています。

４月８日、新２・３年生登校日を市内の中学校を会場に実施しました。内容は仮校舎について、始業式・入学式の日程・当面の部活動・転学についてです。更に新３年生は 14 日～18 日の間、各地区小中学校のグラウンドなどで個人面談を行っています。ここで、生徒の動向を確認しています。教科書はあるか。制服はあるか。現在どこに居住している。弁当は持参できるか。避難所から通学する生徒は弁当を持つことができないのです。

４月 22 日夜、大船渡高校で保護者説明会を実施しました。県教委から施設設備・通学用バス・昼食について説明いただきました。高田高校からは、始業式・入学式の日程・今後の行事予定・制服・部活動について、そして教育相談等のケアについてです。

４月 27 日・28 日、仮校舎設備品が納入となりました。県内 12 校より 1,090 点、県教委緊急購入費で 800 点ほどです。日通の大型トラック 20 台分、そのほかに納入業者契約で大型トラック 10 台ほどです。県教委事務局の方々、事務職員組合の方々が１台のバスに乗り合わせて支援に来ました。トラックから降ろした机椅子を、リレーで３階までの教室に搬入しました。

そして５月２日、始業式を行うことができました。自衛隊が駐留し、本校舎のみが使用できる状態で全校集会できる場所がないため、放送での始業式です。

５月 10 日、入学式は大船渡東高校体育館で行いました。

学校再開後も課題がたくさんありました。震災からの復興と教育環境をどうしていくか。例えば海洋システム科です。海・船・魚に関する分野について、獲る・育てる・加工する・流通させるという生産から流通までのシステムと、海洋環境に関する知識を学んでいます。震災前は旧広田水産高校の校舎、校舎近くの漁港で実習していました。資格取得のための実習施設は流出し実習が困難です。
どのように実習を確保し、資格取得を促進させるか。震災の年は、秋田県立男鹿海洋高校の実習施設を借用しました。

部活動を行うのにも問題がありました。当初、仮校舎には自衛隊が駐留し、校庭全面に自衛隊の車が、体育館・セミナーハウス・格技場にも自衛隊の方々が寝泊まりしていました。配置されたバスを利用して、他市町村等の施設、近隣学校の施設を借用しての部活動となりました。バスの運転手も非常勤で３名配置されています。

震災から１年後の３月１日、仮校舎の体育館で卒業式を挙行できました。現在も、高田高校は先ほどの仮校舎で授業を行っていますが、今年度末には新校舎が完成する予定です。

以上で私の体験談、東日本大震災と高田高校を終わります。

≪鈴木事務長　提供写真≫

震災前の高田高校校舎

市街地（学校周辺）水没した様子

野球用室内雨天練習場

水が引いた後の高田高校校舎（５日後）

１階職員室

大船渡東高校研修会館

被災職員の体験談（宮古工業高校）

岩手県立黒沢尻工業高等学校　主任主査　冨手　明美

余震が続く中、近隣の住民の方々が学校に避難を始めてきました。避難所にはなっていなかったのですが、避難場所にはなっていたので、近辺には高い建物が学校以外にはなく大きな地震があると、地域の方は学校に避難して来ていました。

誘導は副校長や先生があたっていました。

私は内陸出身なので、津波がどういうものか意識していませんでした。住んでいる方は、あの位大きな地震があると、津波が来ることを意識して避難して来たようです。

学校の実習棟の屋上に昇って沖を見ていた先生が、「津波が堤防を越えているから１階ではなく２階・３階に逃げろ」と言う声をかけました。それを聞いて、避難して来た方や職員生徒も３階（最上階）に避難しました。

当時、登校日ではなかったのですが、部活動で来ていた生徒が 40～50 名、職員は学力検査後の資料作成等で全員勤務していました。

沖から押し寄せて来た津波が、堤防を越えて水門に当たって大きな飛沫をあげている様子を、３階から呆然として見ていました。周りには工場や民家がたくさんありましたが、それらを巻き込みながらゆっくりとした波のような感じで、近づいてくるのを何もできずに見ていました。校舎の前に停めてあった職員の車は簡単に流されてしまい、使えない状態になってしまいました。

避難して来た方は２階の、だるまストーブで暖をとってもらいました。教室のカーテンをはずして、少しでも寒くないようにということで使いました。

だんだん夜が近づいて来て、波はもう治まっていた頃に、近辺の流されて来た家のなかから「助けて」という声が聞こえるようになり、先生方が海水を漕いでボートの代わりになるものを作って２～３人救助にあたりました。とても感謝されました。学校に残っていた生徒たちも、積極的に避難して来た方をお世話していました。

夜になり消防団から炊き出しのおにぎりが配られました。優先的に避難して来た方に配って、職員はひとり半分ずつ食べました。とても寒い夜だったので、星空が悔しいくらい奇麗だったのが忘れられません。

工業高校だったので発電機があることに気づき、３階まで運んで視聴覚室のテレビをつけたところ、震災のニュースを呆然として見ながら、パイプ椅子に座って一晩を過ごしました。

翌朝、私ごとではありますが内陸から単身赴任で来ていたので、主人に生きていることを伝えたかったのですが、岩手県内は携帯がつながりませんでした。山形にいる娘にダメ元で電話したところ通じました。娘は公衆電話から花巻の実家に連絡してくれ、漸く生きていることを伝えられ、お互いに

ホッとしました。

　震災翌日に宮古市から、避難所ではないので避難している人の把握が難しいから、ひと山越えた中学校に移動するよう話がありました。避難して来た方はそちらへ移動しました。職員も自宅に帰れる人は一旦帰ることにして、私は帰るところがなかったので中学校に移動して土曜日の夜を過ごしました。
余震が何度もくりかえし起きていて、避難している体育館が壊れるのではないかと思うくらいギシギシ揺れていました。寒さもひどくて、皆、不安な思いをして過ごしていたと思います。
　翌日の日曜日に、花巻の主人が近所からディーゼル車を借りて迎えに来てくれました。漸く家に帰ることができました。

　次に学校へ行ったのが翌週の木曜日で、義理の母の軽トラを借りガソリンスタンドに何度も並んで給油してから学校に戻りました。宮古道路という高速道路から海が開けて見えるところがあるのですが、そこから見た瓦礫とガードレールが海側に曲がっている光景は脳裏に焼き付いて忘れられません。

　学校に戻ってからは校舎の１階（150～160㎝）位まで津波が入り込んでいたので、泥の除去、瓦礫の除去、書庫にあった書類の整理というか使える状態に戻す復旧作業にあたりました。また、財務会計のパソコン等はぜんぜん使えない状態だったので、２階の教室を事務室にあてて県教委から配付された発電機とパソコンで、様々な事務処理にあたりました。県の財務会計とつながっているパソコンは宮古高校にしかなかったので、市内の学校はどの学校も宮古高校に何らかの手段で行って、宮古高校の事務の合間を縫って県の文書を取り出したり、財務会計で支出処理をしたりとても混乱していました。

　宮古工業高校はその後、校舎の災害復旧のために工事が入ることになり、生徒は、宮古水産高校、宮古商業高校にわかれて授業を受けることになりました。宮古水産高校に事務室が移転したので、４月８日に宮古水産高校で離任式を行うまで宮古工業高校に勤務し、次週月曜日の４月 11 日から現任校へ勤務して現在に至ります。

　出身が内陸なので沿岸の方々の苦労を、少ししか皆の手伝いができなくて異動してしまったことが申し訳なく、今でも宮古に心を置いて来たような気持ちでいます。

　つたない話を聞いていただき、ありがとうございました。

特別分科会に参加して

宮崎県立都城工業高等学校　主事　森　絢子

「いつか被災地を自分の足で歩きたい。」その願いが実現した。

宮崎県に住む私にとって、東日本大震災はどこか別世界の出来事のようだった。当時、私は学生で寮生活を送っていた。寮生の顔が不安と困惑、心配でいっぱいだったのは今も鮮明に覚えている。報道で流れる震度の数値が上がるたび、「未曾有」という表現があちこちで使われるたび、瓦礫と泥でいっぱいの町や押し寄せる津波の映像を見るたび、言い様のない恐怖心で包まれた。想像を超えた被害の数々に、自然には抗えないのだと分かっていながらも「どうして日本が、東北が」と思わずにはいられなかった。

月日が経ち、震災の報道が減るようになると、自分の足で東北に行きたいという思いが強くなった。「まだ復興は進んでいない」という声を聞くたび思いは増す一方だったからこそ、今大会、そして特別分科会に参加させていただけると聞いた時は、嬉しさと共に身の引き締まる思いがした。震災から３年４ヶ月、私は初めて東北の地を踏むことができた。

バス内では、震災を体験した職員の自己紹介や被災職員による体験談などの臨場感あふれる様子を聞き、様々なことを考えた。もし、自分が当時全く同じ状況に立たされていたなら……と思うと、普段の危機意識の重要さを感じた。また、学校は生徒の命を預かる機関でもある。災害時に生徒が校内にいた場合の対応についても、自校の場合に置き換えて考えることができた。学校という組織が一丸となり柔軟に動くことの大切さを学んだ。さらに、今の生活が前触れもなく突如として変わってしまうことを考えると、最悪の事態に備えた判断力も含めて意識が正される思いがした。

「あの高さまで津波が来たんですよ。」陸前高田市で地元のガイドの方が指し示した高さに唖然とした。破損したまま今もそこに立つガソリンスタンドの看板が、津波の生々しさを物語っている。13m を超える波がこの場所を襲ったのだ。大槌町でガイドをしてくださった方は、津波を壁に喩えていた。真っ黒な壁が一気に押し寄せてきた。そして引きずり込むように引いた――。だが、一気に街を飲み込んだ真っ黒な壁を頭の中で想像しようとしてもできなかった。どれほどの高さが、威力があったのだろうと考えたが、自分の想像力が限界だった。そのことが却って私の恐怖心を強めた。ましてや、実際にそれを目の当たりにした方々の恐怖心は言うまでもないだろう。建物も人も木々などの自然も、全て目下の黒い壁があっという間に連れ去ってしまうのだから。避難所まで逃げても、屋上まで逃げなかったがために流された人が多くいたことを聞き、高い場所まで逃げることの大切さをひしひしと感じた。陸前高田市でも大槌町でも、海辺に住む人とそうでない人で津波に対する危機意識の差があったという。それが犠牲者の数に繋がってしまったのではないかとのことだった。陸前高田の海辺にあった道の駅は、震災で中が滅茶苦茶になっていたのにも関わらず犠牲者はいなかったため震災遺構として残されるという。意識の大切さを感じずにはいられなかった。

ちょうど特別分科会の２週間ほど前、私の暮らす市で台風接近に伴い避難を呼び掛けるエリアメールが届いた。その時、家族と「どうせここは大丈夫」「何かあれば２階に逃げればいい」というやり取

りを交わしていた。状況は違うにせよ、この意識が後々取り返しのつかないことになるかもしれないのだと考えを改めさせられた。

大槌町の旧役場は２階建であった。一部は震災遺構として残されるが、無残になった建物がその被害の大きさを物語っていた。慰霊碑の前で黙祷しながら、町長をはじめ多くの職員が犠牲になった現実に思いを馳せた。また、一度逃げていながらも家族を迎えに戻り、そのまま帰ってこなかった人も多いというガイドの方の悲しい話に、やはり逃げるという行為の大切さを身に染みて感じた。

特別分科会をとおして印象深いものの一つに「緑」がある。津波で流されたり、取り壊されたりした跡地（更地）にあった雑草の緑色だ。夏空の下、青々しく逞しくも感じるほど伸びる姿に、苦い思いがした。そして、整備された中心市街地を一歩外れると、そんな光景があちこちにあることにその思いが増した。震災に見舞われるその瞬間まで、ここはどのような街だったのだろう。考えるだけで虚しさに包まれた。「復興は進んでいない」そんな声を思い出す。今日も仮設住宅で暮らさざるをえない人たちがいる。汗水流して被災地で作業をする人たちがいる。まだまだ復興は途中だ。風化させてしまうにはあまりにも早すぎる。それでも、私の主観ではあるが既にこの震災は過去の話として風化が始まっている気がする。それはこの地を訪れる前の私自身にも言えたことだ。

失ってしまったものを元に戻すのには時間がかかるし、以前の状態に戻せるとも限らない。加えて、そういった自然災害を未然に防ぐことなんてできない。だから、いざ起きてしまった災害にどう向き合い、どう対処していくかが大切だと思う。自分の立場や状況によって求められてくる役割も変動するだろうが、何かしらのアクションは必要だ。そのためにも、やはり普段の意識は欠かせない。まだ大きな災害を経験したことがない私にとっては尚更だ。学校運営、危機管理、災害対策……改善点は多いにあるだろう。この特別分科会を役立てろと警鐘を鳴らされている思いがした。

最後に、かけがえのない機会をいただいたことに心から感謝いたします。ありがとうございました。

特別分科会に参加して

千葉県立柏南高等学校　主査　松井かおり

［陸前高田市のこと］

盛岡駅前を出発し、バスの窓からはずっと普通に目にする光景が続いていたというのに、ふと気が付くと、そこはジェットコースターのように縦横にのびた土砂運搬用のベルトコンベアがせまる景色に変わっていた。ここが陸前高田市なのか。目にした景色にそれだけで衝撃を受ける。

ガイドの方の「津波の高さは 13m70cm。あそこの高さまで津波がきたんです。」その説明に、振り返って見た先の壊れた看板の高さがあまりに高く、また衝撃を受ける。まして、その津波の速度が時速 300km の新幹線並みとは想像さえしていなかった。

高い津波が来て壊滅的被害を受けた。この程度の知識で訪れた陸前高田市は、３年たった今も、映像でしか被災地を知らなかった私には、その場所に立ち、看板を見ただけで十分すぎるほどに津波の恐ろしさを感じさせた。

防波堤沿いには、２km にわたり７万本の松林が広がっていたそうだが、今は写真でしか見ることができないものになってしまった。

12.5m の防波堤の建設計画があるが、「到達した津波より低いその高さで大丈夫なのか」、「そんな高いコンクリートの壁を作ってしまったら、あの砂浜は戻らないのに必要なのか」と、評価が分かれているとのこと。ガイドの方の「心の防波堤を高くすることに全力を注ぐべきではないのか」との言葉が非常に重く感じられた。

［大槌町のこと］

「津波は黒い水の壁なんです。」ガイドの方の言葉に、ここでもまた衝撃を受ける。テレビの画面で見た津波は、今ひとつその恐ろしさがわかりきれない感じがあった。だが、ガイドの方の口から語られる「黒い水の壁」が迫ってくるということの恐ろしさは十分に感じることができた。まして、自分たちが説明を受けているのは、役場前の広場だ。地震の後、役場の対策本部が設けられ、津波の被害にあった場所だ。初期の気象庁発表の津波の高さが３m だったため、「防波堤が６m のこの場所は大丈夫だ」との判断だったが、40 名ほどの方が犠牲になられた。そして、ここでもまた、「被災した役場を全国の人に見てもらうべきだ」という意見と「辛すぎるから壊してほしい」という意見があるということだった。

「悲しいことがたくさんあって、頭ではわかっていても、いつか帰ってくるんじゃないかって思ってしまうんです。」「津波警報が出たら必ず逃げる。そ

して解除が出るまで絶対戻らないで。」辛い思いをされたガイドの方の切実な訴えだった。

自分自身は、特に被害もなく東北にいる友人たちとは連絡が取れ、せいぜい少額の寄付をすることが地震について多少の思いをはせるときだった。それが今回、陸前高田市と大槌町を訪れガイドの方から話を聞き、自分の無関心さと、「もう３年と思っていたこと」を恥じる気持ちになった。実際に被災地に立ち被災された方の話を聞いている間中、ずっとずっとまばたきをし続けるしかなくて、すごく切なかった。

［岩手県の学校職員の方々の話］

地震発生とともに停電により情報遮断、断水、携帯電話も使えない、そんな中での避難所運営。どの方の話も、「同じ立場にいる自分にできるのだろうか」と思わずにはいられないものだった。どこの学校でも生徒が、とてもよく働いてくれたということだが、職員の方々の働きがあったからこそのものだったはず。どの方の話も頭が下がる思いだった。

いろいろな方の話を聞くうちに、千葉県の参加者の中から、「生徒より先に逃げることができるのか」という話になった。「後で何て言われるかわからないよ」「でも死んでしまったらお終いだよ」と誰も結論を出せずにいた。

その答えなのかなと思われるものが、翌日に行われた陸前高田市長の記念講演の中にあった。

今回、特別分科会に参加することができ、被災地に立ち被災者の方々から直接話を聞くことができたことは、非常に貴重な体験だった。ここで見て聞いたことを忘れることなく、今後に生かしていくことが大事なのだと思う。

海側の住民より山側の住民に犠牲者が多かったこと、陸前高田市役所から徒歩１分のスーパーでは犠牲者が出なかったことからも、日ごろから防災意識をもつことが必要なのだと学んだ。

最後に、このような機会を与えてくださった岩手県の関係者の皆様をはじめ、全国協会、千葉県事務職員会関係者の皆様、快く送り出してくれた事務室の皆様に感謝申し上げます。

『協会ニュース』岩手大会特別号

文章及び写真の著作権は、全国公立高等学校事務職員協会に帰属しますので、転用・販売などは禁止します。

『学校事務』10 月号でも、他の参加者 2 名の特別分科会報告が掲載されますので、そちらも併せてご覧ください。

発行　　全国公立高等学校事務職員協会
編集担当　広報部：菊地　隆